

星空

近ごろは冴えた美しい星空を見ることも稀になった。たまに夜遅く見上げる空も、どこかずっきりしない。市街地であの冴え渡った神秘的な星空を眺めることは、もはや不可能なのかもしれない。スモッグやネオンサイン、その他もろもろの環境的悪条件が重なっているからだ。

それに比べて昔の空はきれいだった。経済的繁栄と自然環境とは相反するものらしい。私の記憶に鮮明に残る星空が二度ある。最初は五歳の時のものである。

昭和二十年八月十五日未明、小田原地方は空襲を受けた。ザアーツと焼夷弾が夕立のような音をたてて落ちてきた。市の中心部から発生した火災は勢いが強く、町内の人達は一斉に避難した。私たち家族も父を残して小田原郊外の田園地区に必死で逃げた。母は弟を背負い私の手を取って姉や兄を引き連れて難を避けた。空には紅蓮の焰が大きく長く猛々しく広がり、米軍機が徘徊していた。無数の星が満天に輝き、天の川が銀砂子をまいたようにひとときわ煌めいていた。星々は地上の阿鼻叫喚を冷たく、しかし悲し気に見つめているようだった。

私はあの夜の空に地獄の恐怖と滅びの不気味な美しさと神とも言うべき別の次元の存在を子ども心にも深く感じた。焼失家屋は約四百軒、死者は十一人であった。幸いにも私の家は戦災を免れたが、この終戦当日の空襲は、恐らく米軍機による日本最後の空襲だったのではないかとされている。あの夜の経験が私の原体験のような気がする。

一度めは昭和四十二年十二月に眺めた夜空である。

この年とはかくついでいかなかった。三月に認知症になった父の不始末により家が火事になった。衰えた父の最後の姿を思い出すと、今でも胸が痛くなる。そして八月には職場（神奈川県土木事務所）の汚職事件が起きた。それは県始まって以来の大汚職事件となり、業界、官庁側合せて十人を超える逮捕者が出る始末だった。県警捜査二課の厳しい取り調べが続き、マスコミは連日大きく報道した。私はその土木事務所の一職員だ

った。事件は政治家、業者、役人の癒着による典型的な構造汚職であった。困ったことに婚約中の妻の父が建築業を営んでおり、贈賄業者の内の中心人物だったことだ。私は非常に苦しいシチュエーションに追い込まれた。この出来事はその後の私の役人生活に少なからぬ影を落した。

ただ私は後日内情をよく知ってから義父がとても気の毒に思えた。もち論義父の罪は罪として厳粛に受けとめている。今となつては嫌な思い出だが、私自身を含めてあの折の関係人物を冷徹に見られるが。

この事件のほとぼりが冷めた頃、父の病状が悪化して入院する破目になった。十二月九日の夜、父の看病を終えて焼けてしまった生家から国道一つ隔てた飛び地に在る、仮住まいのバラック小屋に戻ってきた。バラック小屋は建て付けが悪く、そのうえ鼠の大群に悩まされて寝不足が続いていた。外にある水道をラッパ飲みし、疲れた目を洗った。顔を拭き終えて何気なく見上げた空に、一面に広がる星が凜冽な美しさをもって迫ってきた。その時、天空に弧を描いて流れ星がよぎった。私は暫し見つめていた。翌日、父は息を引き取った。

あの夜の星空は、人生の孤独と厳しさを運命的な予兆をもって教えてくれた。

この二夜以外に特にこれといって記憶に残る星空はない。白然の精美さは環境の良さも大切だが、人間の心にも関係があるようだ。近ごろ美しい星空を目にすることができないのは、空が汚れ、街の照明が大規模化したためだが、私の精神が安逸に流れているからではないかと自戒することがある。